

琉球大学学術リポジトリ

肉豚の肥育

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-07-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮城, 悦生, Miyagi, Etsuo メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/21193

肉豚の肥育

養豚の最終の目的は、その肉の利用にあるので早熟早肥で飼料の利用性が高く、且つ少量の飼料で経済的に発育肥満せしめてと場に出す豚に仕上がるとともに、良質美味の肉を市場に供給することである。そのためにはどのような豚をどのような飼料で飼育したら、より経済的で且つ市場の要求する肉を生産するかについて説明します。

1. もと豚の選定

養豚経営は「もと豚」の導入から出発します。いいかえれば、いかに設備を完全にし、管理に細心の注意を払っても、導入した「もと豚」の品質が悪ければ、確実な利益をあげることは困難であります。それ故「もと豚」の導入に当っては、次の諸点を充分検討して導入することが望ましい。

第1表 各品種の能力

品 種	産子数	90 kg 日令	飼料要求率	背脂肪の厚さ	背 腰 長	胸腰椎数	枝肉歩留
		日		cm	cm	本	%
ランドレース	10~13	150~170	3.0~3.5	2.0~2.3	78~81	22	73~75
チェスター	8~10	180~210	3.5~4.0	2.3~2.8	70~75	21	70~73
中ヨークシャー	10~12	200~230	3.3~4.0	2.1~2.6	73~78	21	70~73

注① 大ヨークシャーはランドレースとほぼ同じ。

② ハンプシャーはチェスターとほぼ同じであるが、産子数は10~12頭、背脂肪は稍々うすく、全脂肪量もすくない。

③ パークシャーは中ヨークシャーとほぼ同じであるが産子は8~9頭、脂肪も稍々多い。

第1表から各品種の能力を検討すると

(イ) 発育速度(90kgに達する日令)は、ランドレース、大ヨークシャー等の大型種が速い。

(ロ) 飼料の利用性、ランドレース、大ヨークシャー、等の大型種が飼料要求率※(この数値が低い程飼料の利用性の高いことを示す)が低い。

(ハ) 赤肉の生産、一般に椎骨数(俗にアバラ骨)が多く、胴伸びがよく、中軀後軀がよく発達し、枝肉の歩留が高く、背脂肪のうすい品種がすぐれている。

以上のことから「もと豚」の品種としては、ランドレース、大ヨークシャー等の大型種が適している。

(1) その地域に適し、能力の高い品種を選ぶ豚を用途別に大別するとラードタイプ(脂肪を多く生産する品種)と、ベーコンタイプ(脂肪が少なく赤肉を多く生産する品種)とに分けられますが、どのタイプの品種を選ぶかはその地域の食肉の嗜好によって決まるのである。最近、沖縄における食肉の嗜好は、従来の脂肪質の肉から赤肉へと変わりつつあり、それにもなってラードタイプの品種は敬遠され、ベーコンタイプの品種がよるこばれるようになっております。

又赤肉を多く生産するとともに、発育が速かで飼料の利用性の高い品種を選ぶことが大切である。そのためには各品種の能力を知ることが必要である。そこで、現在、沖縄に飼育されている品種の諸能力を示すと第1表のとおりである。

(2) 品種の特徴をよく表わし、発育のよい子豚を選ぶ

一般に肉用子豚は繁殖用子豚と違って、豚であれば何んでもよいと考えがちですが、これは大きな考えちがいであって、充分にその系統、外貌等を検討して選ぶべきである。

子豚を選ぶに当っては、まず、その品種の特徴をよく表わしているものでなければならぬ。よく特徴を表わしている子豚は一般に能力が高いといわれている。大型種の体型としては、総体的

$$\text{※飼料要求率} = \frac{\text{撰取飼料重量}}{\text{増体重}}$$

1kg増体するために消費する飼料の重量で表わす。

にのびのびとし体軀は頭頸部肩等、前の部分が軽く中軀並びに後軀がよく発達しているのがよい。

次に同腹の子豚の数が多く、順調に斉一の發育しているものの中から食欲旺盛で、元気があり、栗悍なものがよい。又導入子豚の体重は、その後の發育に影響を及ぼすので、導入を急ぐことなく適当な体重で飼料の食いこみが充分な子豚を選ぶことが大切であります。大型種は生後60~70日位のもので、食いこみよく、体重20kg程度のものがよい。

なお導入に際して注意すべきことは、必ず豚コレラ、豚丹毒の予防注射を移動2週間前迄にすませたものを選ぶべきである。

2. 肥育の方法

肥育の目的は、筋肉（赤肉）に適度の脂肪をつけ肉質をよくし、肉の歩留や経済価値を高めることである。

(1) 運動

豚の肥育は生長の途中の肥育で、筋骨の増成と

第2表 肉豚飼料の種類別配合割合

飼料 体 重	澱粉 質類		ぬか類	蛋白質類 (大豆, 魚粉等)
	穀類	イモ類		
kg	%	%	%	%
20~40	10~15	40~50	20~25	20
40~70	10~15	40~50	30~35	10~15
70~90	10~15	50~55	30~35	5~10

注① その他にカルシウム類を全飼料の1~2%食塩0.5%添加する。

② 青物を十分に給与すること（特に小さい時期）

第4表 各品種の月別体重（単位kg）

品 種	月 令	生 時	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	ランドレース		1.4	8	18	35	50	70	90	110	130	150
チェスター		1.3	7	15	26.5	45	58	73.5	93.5	109	124	143
中ヨークシャー		1.2	7.5	15	23	35	65	65	80	95	110	125

給 与 量

飼料の給与量は、大体、体重20~40kg迄は体重の1/20, 40~70kg, 1/25, 70~90kgは1/30が適当であります。

脂肪の改善でありますので、あらかじめ体重40~60kgぐらいまでは十分運動させるか、或はゆとりのある豚房で飼育して筋骨の発達をはかり、その後運動を制限して体重90kgぐらいまで飼育し、筋間に適度の脂肪を沈着させて肉質をよくする。

(2) 飼 料

配 合 方 法

日本における肉豚の飼養標準は一般にD. C. PとT. D. Nで示されている場合が多く、大体、体重20~40kg迄はD. C. P12%内外T. D. N72%内外40~70kg迄はD. C. P11%内外T. D. N71%内外70~90kg D. C. P9~10%T. D. N70%内になるように配合すればよい。しかし、一般農家で計算することは困難かと思われまので、簡単で且つ上記に近い配合をする方法として、第2表の比率で配合したらよい。

第3表 肉豚飼料の給与量

前 期				後 期			
体 重	飼料給与量 (風乾物)			体 重	飼料給与量 (風乾物)		
	以 上	未 満	中ヨーク パーク		以 上	未 満	中ヨーク パーク
kg	kg	kg	kg	kg	kg	kg	kg
20	22	1.0	1.2	50	53	2.1	2.4
22	24	1.1	1.3	53	56	2.2	2.5
24	26	1.2	1.4	56	59	2.3	2.6
26	29	1.3	1.5	59	62	2.4	2.7
29	32	1.4	1.6	62	65	2.5	2.8
32	35	1.5	1.7	65	68	2.6	2.9
35	38	1.6	1.8	68	71	2.7	3.0
38	41	1.7	1.9	71	76	2.8	3.1
41	44	1.8	2.0	76	81	2.9	3.2
44	47	1.9	2.1	81	86	3.0	3.3
47	50	2.0	2.2	86	90	3.1	3.4

日本の産肉能力検定飼料の給与基準は第3表のとおりで、1日朝夕2回に分けて与える。

D. C. P = 可消化粗蛋白質
T. D. N = 可消化養分総量

又農家で体重測定が困難な場合には、月令から体重を推定し、上記の体重の比率により給与量を算出する。(各品種の発育は第4表のとおりである)。

いずれにしても、実際に飼料の給与に当っては、豚の食いこみ状態をよく観察して、それが適正である否かを判断することが望ましい。

飼料と肉質

肉の質や風味のよしあしは、主として脂肪の品質によって左右され、その脂肪の品質は与える飼料によってちがう。このように飼料と肉質および脂肪の間には密接な関係があるので、肥育飼料は十分注意して与えなければならない。豚の脂肪は純白で硬く弾力性のあるものがよい。飼料の種類と肉質との関係は第5表に示すとおりである。

第5表 飼料と肉質

肉質	蛋白質類	ぬか類	澱粉質類
上	脱脂粉乳 バター ミルク 牛乳 棉実粕 コブラ ミール	フスマ 麦糠	甘藷 馬鈴薯 澱粉粕 大麦 小麦 碎米 カボチャ キクイモ
中	大豆 大豆粕 豆腐粕 魚粕 (油を含まないもの)	脱脂米糠 米糠	トウモロコシ 粟 ヒエ ア メ粕 アン粕 ビール粕 焼酎粕
下	蚕蛹粕 ナタネ粕 アマニ粕、落花生 粕 醤油粕		

第5表から、よい肉豚を生産するための肥育飼料の給与は、体重が30~40kgぐらいになるまでの発育期には、魚粉や大豆粕のような蛋白質飼料やフスマなどのような豚の嗜好に適する飼料を多く与えて発育を促進し、発育がすすむにしたがって、次第に蛋白質を減らし、肉質をよくする穀類やイモ類などの澱粉質飼料を多くする。

又、飼料はどんな栄養価に富んだものでも、単味で完全なものはないので、必ず各種飼料を配合して、豚の要求する栄養分を十分に与えるようにする。できれば5種類位配合することが望ましい。

参考までに、畜産試験場が現在使用している飼料の配合割合を例示します。

第6表 飼料配合割合

飼料名	前期	後期
イモ (乾)	26%	31%
フスマ	13	14
トウモロコシ	36.5	37.6
アルファルファールミール	3	3
大豆粕	12	8
魚粉	7	4
カルシウム剤	1.5	1.5
食塩	0.5	0.5
ビタミン剤	0.4	0.4
抗生物質	0.1	—

(宮城悦生)